

INSTITUTE
OF
CONTEMPORARY
ASIAN
STUDIES

ニュース・レター

2008

表紙PHOTO:Asian Languages Speech Contest 11thの舞台



DAITO BUNKA
UNIVERSITY

国際関係学部・現代アジア研究所



国際関係学部*の*いま、そしてこれから

HIROAKI MATSUI

国際関係学部長・現代アジア研究所長 **松井 弘明**

皆様いかがお過ごしでしょうか。今年も国際関係学部の様子をお知らせするニュースレター発行の時期となりました。大東文化大学国際関係学部は今年で創設23年になり、これまでの卒業生は6000人近くになります。第1期生はすでに40を越える年になり、逆に平成生まれの学生が半分近くを占めるほどになっています。大学をめぐる状況も大きく変わり、大学を選ばなければほとんどの希望者が大学に入学でき、それでも私立大学の約半数が定員割れになるという大学にとって厳しい時代に、各大学ではさまざまな工夫を凝らして、学生のニーズに答えようとしています。わが国際関係学部も例外ではありません。

本学部では初年次教育を特に重視しています。1年次の特に前期は大学に慣れることが大事で、ここでつまずくと不登校になり、休学や退学につながることもあるからです。初年次は10人程度の小人数クラスを設け、大学の授業に必要なスキルを学んでもらうとともに、教員・学生同士の親しい関係を作りやすい環境を提供しています。2008年度前期の退学率は約0.5%で、全学の0.8%より低くなっていますが、さらに退学者を少なくした

と思っています。来年度から、大学に早く慣れてもらうため、新入生の合宿を行う予定です。

本学部の就職率は約70%ですが、これをもっと上げるため、キャリアセンターと連携して1年次から就職への意識を持たせるように、さまざまな機会をつくっています。本学部の卒業生の就職先としては、卸売り・小売業とサービス業が最も多く、これだけで60%を超えるほどです。今年は特に厳しい経済事情のため、内定取り消しになる学生もいますが、このような学生のため、卒業を延期することもできる制度を検討中です。経済的理由から勉強の継続が困難になる学生も増えていますが、大学として奨学金の額を大幅に増やし、貸与をやめすべて給付にするなど、その面での対策もとっています。

健全な、また充実した学生生活を送るためには、保護者の皆様との密接な連絡が欠かせません。御意見等ございましたらどしどしお寄せいただければと思います。今後も本学部のためご支援をよろしくお願い申し上げます。



「眩しいほどの宝石の世界によろこそ」

去年のスピーチコンテストは、切り取られた一枚の写真のような幻想的に美しい舞台となった。今年のスピーチコンテストはよりカラフルに立体的な舞台にしようということになり、ステンドグラスに決まった。さまざまな色を使う、ステンドグラスを作る際に配色にこだわった。アジアには、多くの人種や文化が混在している。あえて、国境で色を変えるのではなく、アジアを強調した地図を書き、アジア全体にさまざまな色をちりばめた。それに今回のスピコンのスタッフのアジアへの願いがこめられている。

(プロデューサー 国際関係学科3年 伊藤啓太)

学部の近況

「大学不適應」とは

YUTAKA NIINO
国際関係学科主任 **新納 豊**



国際関係学部では大学に不適應状況にある学生を早期に発見して対策を講じるために、毎年前期には必修科目を中心とする出席不良者、後期には前期での単位取得不良者から割り出した学生に対して面談・指導を行っています。必修科目は「演習(ゼミ)」を除いて2年次までに取得するようになっており、主に1年生対応策と言えます。実際、引っかかってくるのは大半が1年生で、2年生の場合は1年次に抱えていた問題がまだ解消されていないというケースがほとんどです。2008年度前期には約30名、後期には約20名の学生と面談を行いました。これは面接候補者リストの約半数です。

面接によって出席不良等の背後にあるそれぞれが抱えている多様な問題が見えてきます。中学・高校時代に「いじめ」体験があり、再起を期して大学に来たがなかなかとけ込めない者、アトピー等の持病のために何事にも消極的となり「ひきこもり」気味の者なども決して少なくありません。共通点は友達がいらない、居場所がないこと。これでは学習以前に通学自体が苦痛ですね。「君はこの授業だけは出ているようだね」と聞いて、「先生が僕のことを覚えていてくれたから」という涙が出るような話も聞きました。これらは少し時間のかかるケースです。

典型的な「不適應」症状は「授業が理解できない」とか「面白くない(興味が持てない)」というものです。こうした学生は大別して二種類です。一つは、だから授業に出なかった、あるいは試験を受けなかった者。二つは、授業にも出て試験も受けたが不合格になった者。前者は、「なぜ?」と問い続けると、最終的に「自分がさぼりたかっただけですね」と気づいてくれます。

後者の場合、「理解できない」のはどうやら「答えがない」からのようです。大学での試験ではよく「～について論じなさい」という問題が出ます。一般的な答えはないので、「あなたはどのように考えますか」と問うているのです。大学では、高校までの「答えを覚える学習」から「考える学習」へと進んでいきますが、前提として話をよく聞く力と、「なぜ?」と自問する力が求められます。いずれの力も近年全般的に低下し続けています。つまり面接対象となった学生は氷山の一角と考えなければなりません。世間では「人間力」とか「社会人基礎力」とか言われていますが、そうした人材育成的な観点も取り入れた初年次教育に今後とも取り組んでいくつもりです。

現地研修を学部教育の主役に

HIDEAKI ISHIDA
国際文化学科主任 **石田 英明**



国際交流委員会の担当になり、現地研修に関わり続けた1年でした。現地研修は当初のように必修ではなくなり、選択科目になって久しいのですが、最近は履修者の減少が目立つようになってきました。2008年度の履修者は151名で、在籍数(261名)の58%弱にとどまりました。来年度は現段階で約140名が履修希望となっています。ただし、在籍数が236名なので、割合では59%強という数字になり、今年度を上回りますが、4月の履修登録時にこの数が増えることはあまり期待できず、むしろ減る方が懸念されます。

履修者の減少傾向に歯止めをかけるべく、1年生が来年の履修にもっと具体的に興味を持ってくれるようにと、今年はいろいろなことをやってみました。今年現地研修に行った2年生に経験を語ってもらう報告会は地域言語の授業をお借りして全地域で実施していただきました。写真コンテストは今年から始めた行事ですが、優秀作品を選ぶ投票権は1年生だけにあるという形式にして1年生に関わり意識を持ってもらえるようにしました(優秀作品を本誌の裏表紙に掲載してありますので、ご覧ください)。しかしこの程度のことでは、実質的に大きな変化は望めないのでしょうか。結果は来年の履修予定者数に現れています。

今年度2年生で現地研修を履修しなかった人に対して、その理由をアンケート形式で尋ねました。回答数は不参加者の4割程度でしたが、それでも特徴ははっきり出ていて、最も多い理由は料金が高すぎるといふものでした。いくらなら行けますかという質問には、20万円台なら、という回答が多く見られました。地域によっては以前からかなり高額になっている地域もありますが、今後は料金の引き下げと中身の充実が大きな課題です。

しかし何よりも大切なことは現地研修の意義がどれだけ学生に、そして教員にも理解されているかでしょう。来年度はいよいよ「現地研修テキスト」の作成が始まります。学部の叡智を結集して、アジアでアジアを学ぶ意義を全員で再確認し、現地研修を学部教育の主役にしっかり据える年にしたいと思えます。



PAKISTAN

パキスタン



TOSHIHIKO SUDA

国際関係学科准教授

須田 敏彦

去る9月12日から10月6日まで25日間にわたるパキスタンでの現地研修が、学生8名(女性1名、男性7名)の参加により実施されました。昨今パキスタンの政治情勢が不安定なことから、現地研修の実施は難しいのではと懸念する声も出発前にはありました。しかし滞在中大きな問題はなく、参加者全員にとって満足のゆく充実した研修となりました。

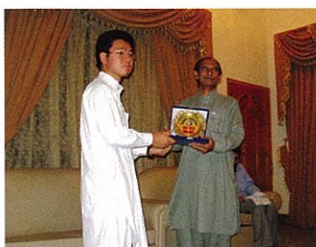
研修期間中は、協定校のパンジャブ大学で10日間、パキスタンの共通語であるウルドゥー語の語学研修を受けました。授業中は講師の先生方から熱心な講義を受けた他、夜には家に招待されて夕食などをご馳走になりました。また休み時間中には外国人の私たちに興味津々の現地の学生達と交流を深めました。「忍者」スクールのインストラクターやおしゃべり好きの女子学生など、個性的な学生たちと会うことができました。放課後は習ったばかりのウルドゥー語を使って、キャンパスの近くにあるラホール博物館や世界遺産のラホール城を見学したり、宿舎近くの運動場で現地の子供たちとクリケットやバスケットをして遊んだり、バザールでショッピングなどをして楽しく過ごしました。国民のほとんどがイスラム教徒ということで、禁欲的でちょっと固いイメージをパキスタンの人たちに抱いていた学生が多かったのではないかと思います。実際の現地の人びとは陽気で気さくでした。

語学研修の合間や修了後は、歴史や文化、そして経済や政治などを肌で学ぶため、パンジャブ州のあちこちを訪問しました。古代文明の1つインダス文明のハラッパー遺跡や、仏教芸術が

花開いたガンダーラ地方の中心地タキシラの遺跡などを見学したほか、日系企業であるホンダのオートバイ工場、世界のサッカーボールの3分の2が作られるというシアルコート市のサッカーボール工場など訪問しました。サッカーボール工場の社長さんの叔母さんは、パキスタンに嫁いで30年以上になるという日本人の女性で、パキスタンで生活することの苦労話や楽しい思い出話などを聞くことができました。インドとの国境の町ワガーでは、パキスタンとインドの国境で行われる国旗降納式を見学し、もともと一つの国だった英領インドが分離独立してできた両国の歴史と現在の緊張を肌で感じました。

今年度のパキスタン現地研修の特徴は、これまでの現地研修ではあまり行くことのなかった農村に足をのびし、ホームステイをしたことです。大東大講師のダーネシュ先生の実家がある村を訪問し、農家や畑、田んぼ、灌漑用の水路などを見学しました。また村の子供達から女性、そして長老達まで幅広い人びとから温かいもてなしを受けました。ちょうど断食月(ラマダーン)明けのお祭りの日だったこともあり、大変なご馳走をいただき、皆大満足でした。そしてその日の夜はなんと、家の屋上にベッドを並べ、星空を見ながら眠りに就いたのです。

日本を発つまでは少し不安もありましたが、大変充実した研修となり、みなパキスタンが大好きになって帰ってきました。滞在中は、日本ではできない経験や発見、そして色々な人びととの出会いの連続でした。研修を終えた学生の1人は、来年1年間パキスタンに留学することを早速予定しています。



SHANGHAI

上海



YOSHIMASA SHIBATA

国際関係学科教授

柴田 善雅

2008年8月3日～30日の28日間に上海で現地研修を実施した。参加者は学生25名(国際関係学科12名、国際文化学科13名、女性8名、男性17名)で、引率教員は柴田1名である。当初は別の教員が貼り付けられていたが、5月に急遽柴田が肩代わりして事前研修を行い、途中脱落者もなく、そのまま8月に上海に移動し、研修を開始した。中国は初めての学生がほとんどで、しかも外国旅行が初めての学生も多かった。

上海師範大学に4週間滞在し、学生達は、午前は漢語の授業を受け、午後は書道・中国語の歌・太極拳の講座、上海師範大学日本語学部学生との交流会、夜は雑技団、夕食パーティーと、ほどほどに忙しくスケジュールをこなした。午前の漢語授業では2クラスに分かれて口語漢語を重点的に学習した。1年半の東松山キャンパスで受けてきた漢語訓練の積み重ねの結果として、学生のレベルにかなりの開きがある。学生達に毎日出席を促し、集中的な漢語訓練による力量の引上げを期待した。大東文化大学とはほぼ同じスケジュールで、他の大学も現地研修を行っていた。特段の予定のない午後は、上海師範大学学生とバスケットボールで日中対抗戦を繰り広げて交流を図る学生もいたが、キャンパス外では上海下町の漢語の現地訓練として、代表的な観光地の豫園、バンドや南京路での買い物を楽しんでいた。男女問わず土産物屋では、いずれも値切りの達人になり、当初の提示価格の4分の1以下で購入していたようで、買い物最大の楽しみになっていた。また蘇州と南京に2泊3日の域外旅行を行い、虎丘、寒山寺、中山陵、玄武湖、夫子廟等の定番観光地を巡り、上海とは

違った町を体験できた。そのほかジャズ・ライブを鑑賞し、客単価から見て超格差社会の上海を実感してもらい、また長江本流まで黄浦江を船で下り、週末の昼下がりをものんびりと過ごした。最後に恒例の旗袍パーティーで卒業を祝い、25名と教員のコミュニティの一瞬の夏は終わった。

学生達は慣れない漢語を使う生活で、また宿舎の共同生活を送ることで、いくらかきつかったかもしれないが、さまざまなインパクトのある体験を得た。個人的に印象や受け止め方には差はあるものの、大学生の集団研修という二度と味わうことのできない意義のある4週間を過ごすことができたはずである。あいにく宿泊施設の改装工事にぶつかり、騒音や断水に悩まされたのが少々残念だった。元気な学生達が毎晩欠かさず柴田の部屋の飲み放題パーティーに集まり、ストレスを発散するため、その飲料等の補給に忙しかった。途中、食あたり等により体調不調者が少なからず発生したが、クリニックの治療を得て、何とか体力と気力で乗り切ってもらった。柴田の気配りが足らず、また体育会系のノリで行動しやすいため、学生の生活回りに十分な世話ができなかったが、それでも参加学生は概ね現地研修を楽しく過ごすことができたのではと想像している。ただしこれは引率教員の希望的観測に過ぎないため、本音はわからない。





特色GP報告

2006年度「特色ある大学教育支援プログラム」に選定された「アジア理解教育の総合的取組」。2年半にわたる意欲的かつ多彩な事業の一端を報告します。

アジア芸能の夕べ

本学部は、身体を動かしながら学生たちのアジアへの興味と理解を育てる「アジアの身体とパフォーマンス」を開講し、アジアの音楽や舞踊の第一線で活動する専門家を招いて実技指導を行ってきました。「アジア芸能の夕べ」はこの講座を拡大して地域の住民にも開放しようという趣旨で企画されたものです。2007年と2008年に東松山市等の後援を得て、東松山キャンパス内の講堂で開催されました。延べ動員数は1500名を超える盛況振りで、今後もプログラムを変えて実施し、東松山地域の恒例行事として定着させたいと考えています。



インドネシア・ジャワ島の
伝統楽器ガムランをフルセットで購入(写真)

刊行物の紹介

特色GPの柱である「アジア地域言語教育」「地域研究カリキュラム」のためのたくさんのテキストが刊行されました。テキストは、学部のホームページからダウンロードすることもできます。



大豆のアジア学

「大豆」を通じてアジアの食を理解しよう。「学生による企画・参加・実行型の活動」の中心は、「大豆のアジア学」。2007年度より「特殊講義」として正規の授業科目となり、2008年度には、東松山キャンパス内について念願の実験農場が建設されました。学部学生はもとより、中国、アメリカ、ドイツなどからの交換留学生も交え、あるときは開墾作業、あるときは豆腐や味噌づくりと活動の場をどんどんひろげていきます。「大豆のアジア学」はTBSラジオ「土曜ワイドラジオTOKYO 永六輔その世界」(2007年11月3日)で、生中継されました。



アジア理解教育

◆ 高校生のためのアジア理解講座 ◆

「高校生のためのアジア理解講座」は、本学部が創設以来進めてきたアジアに関する研究と教育の成果を、高校生を中心とする一般の人たちに還元するための事業です。映像や音楽などを用いた多面的な講義に多数の高校生が参加しました。

2007年度

前期

アジアとはどんな世界だろう？(押川典昭)
 イスラム教とは何だろう？(高野太輔)
 ガンディーのインド・ITのインド(井上貴子)
 米と象とムエタイの国タイ？(遠藤元)
 日本と中国のはざまから日中関係を考える(鹿錫俊)

後期

韓国社会と儒教(古川宣子)
 ベトナムにおけるドイモイ政策と文学(加藤栄)
 インドの魅力ー体験的インド論ー(篠田隆)
 イスラームと政治の関係(松本弘)

2008年度

日本人の想像カーオバケと幽霊ー(高桑守)
 米と象とムエタイの国タイ？(遠藤元)
 海外留学のための英語講座(ギャレン ムロイ)
 ビートルズと旅するインド(井上貴子)
 ヨーロッパの近代芸術とアジア(樋口桂子)
 レオナルド・ダ・ヴィンチと東洋(田辺清)
 アジアの宗教美術ーアンコール遺跡ー(水野さや)

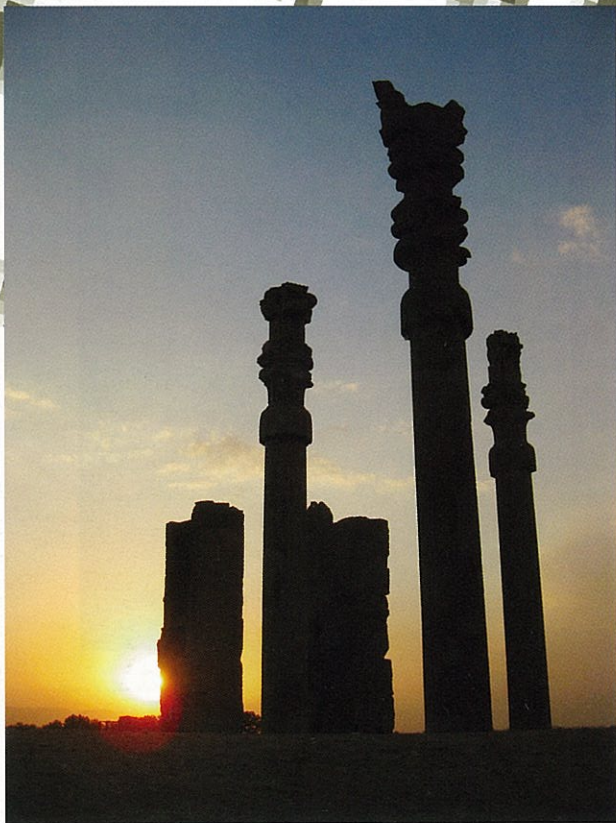


◆ 社会人のためのアジア理解講座 ◆

「お茶を愉しむ～日本、アジア、ヨーロッパ～」は、大東文化会館を会場に2008年10月25日(土)から11月29日(土)まで毎週土曜日午後2時から4時、全6回にわたって開催されました。

「ヨーロッパの茶文化」瀧口明子(大東文化大学)
 「中国の茶文化」高橋忠彦(東京学芸大学教授)
 「日本の茶文化」田中仙堂(大日本茶道学会副会長)
 「紅茶と砂糖の出会い」生田 滋(大東文化大学名誉教授)
 「スリランカ紅茶の楽しみ方」磯淵 猛(紅茶研究家・エッセイスト)
 「西アジアの茶文化」鈴木 均(アジア経済研究所・副主任研究員)





INSTITUTE
OF
CONTEMPORARY
ASIAN
STUDIES

ASIA 21 ニュース・レター 2008
2009年3月

編集人：大東文化大学国際関係学部 現代アジア研究所広報出版部会
発行人：松井 弘明

発行所：大東文化大学国際関係学部 現代アジア研究所広報出版部会

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
TEL.0493-31-1523 FAX.0493-31-1524

編集・制作・印刷：大屋印刷株式会社